

„Gott ist tot!“ をめぐる一考察

木 阪 昌 知

„Gott ist tot!“ という言葉が初めて言い表わされたのは **Zarathustra** に先だつ一年前、自らを歴史の総体として、全く、ある宿命的な神への帰依を避け難く感じていたニーチェの、ニヒリズムと永却回帰を予告していみじくも反照なき警鐘の断片と化した **Die fröhliche Wissenschaft** に由来する。

仮象なき原理の累積された形而上学的神秘主義に対して、此岸的命法をもって神の死を告知する **Die fröhliche Wissenschaft** の系譜は、**künstlerisches Bewußtsein** と **künstlerisches Unterbewußtsein** が無限に錯綜して回帰するディオニュソスの彷徨を、未来に於ける **tröstliche Erwartung** へと駆立て、そこに生じた諦念的意志否定の不協和的分裂的本質を悲劇的世界に啓示する **Geburt der Tragödie** と、自らを勝利と卓越への欲求で満たされた過剰な意志の主宰者・権力を生命そのものとして充溢する **Wahrhaft-Seiende, Ur-Eine**、命令の熱情として直線的な信仰のパトスがあかす形而上学的典型の必然的一体感を予言する **Zarathustra** の中間に位置している。それは、没落と否定の谷間に混在する芸術的衝動が享受する東洋的予感と、未踏の道を求めて苦痛に耐える西洋的な意欲の緊張という、隔ることのあまりに大きな間隙の合間にあって、超感性的世界一般に於ける最高価値の喪失と転倒、諸価値の支配の中に新しい価値の録板を定立する **Nihilismus** の解放を孕み、キリスト教の不快な啓示に政治的・支配的抑圧を感じていたニーチェが、真に運命的拘りをもつて孤高な戦いを歴史に挑む現実の兆しを象徴している。あまりに過剰であった

ギリシャ悲劇への期待から、世紀末的諸相の予言者として、未来に新たなる価値の録板を啓示せんとするこの矛盾と不統一の精神にとって „Gott ist tot!“ という言葉の意味するものはしたがって、単に語義的解釈の範囲にとどまることを許さない。ニーチェにあって神の死の問題は、その意味と内実に加えて思想の変遷する多様な様式をその過程に遡り、視点を拡散する遠近法に試みてその根拠を検証することなしに „Gott ist tot“ の理解は成り立たないからである。

1

ニーチェは、ソクラテス的な文化の胎内に秘められているアレクサンドレイア的な理論的楽観主義を破綻の徴候とみなし、かかる病患と疲労の現象を巨視的に洞察して、人間的な意欲の無限に錯綜する現実の戦いを単純化し、事物の普遍的認識と個体の精神的、倫理的能力を緊張せしめ、芸術家的意識と芸術家的な潜在意識が生ぜしめる悲劇的芸術の伝道者、悲劇的世界観の告知者たるべく *Geburt der Tragödie* を著作した。Richard Wagner の音楽はこの悲劇的芸術の期待に対応する *metaphysischer Trost* を刺戟し、*hellenischer Wille* と *metaphysischer Wunderakt* によってアポロンとディオニュソスの対立をより高次の救済へと生を増大させる円環的構造に満たされていた。即ち、個体を破壊してそののち、*eine mystische Einheitsempfindung* によって救済せんと務める陶酔的現実として民謡を、そしてこの根源的旋律が対応する夢の形象が神話に表現され、民謡に自由を解放する代償として神話は、言葉や形象が単独では決して到達することのない形而上学的意義、没落と否定を超克して今一度生へと駆りたてる確実な予感を享受し、ここにアポロンとディオニュソスの相互に関連しながら止揚し、矛盾と統一の亀裂をくりかえしながら円環的構造の二様の作用を生ぜしめる *Ding an sich* の世界を現出していた。しかもヴァーグナーは、最も異様で苛酷な諸条件の中にあってもすら尚手離すことの出来ないディオニュソス的なもの、即ち *Ding an sich* の世界を科学的実証精神と芸術家的独創性をもって根源的苦痛と戯れる歓楽の世界、たとえば、世界支配

の象徴である黄金の指輪をめぐってアルベルヒとヴォータンが相争う権力闘争を描いて遂には両者滅亡による旧世界一切の没落のうちに、世界不正の根源と運命を追求し、同時に新世界の曙光を啓示する **Der Ring des Nibelungen**, 七年目に巡り来たる果しない輪廻の因果律は、苛酷で邪悪、破壊的でしかも過剰にあふれる歓喜の謎めいた生を象徴するディオニュソスの、不断に作用しながら刺戟して統合するアポロンの再来を現出して悲劇的であり、苛酷な運命に耐えて尚肯定せんとする意志の悲劇的予感を孕んでギリシャ的な **Der fliegende Holländer**, ローエングリンとの禁間を破って息たえるエルザの不可抗的宿命を悲劇的世界に象徴した **Lohengrin**, 伯父王の妃となるべきイゾルデと相愛の関係に陥ったトリスタンが、王の家臣メロートに討たれ、イゾルデもそのあとを追って愛の死をとげる伝説悲劇、締念的な意志否定のより高い悲劇性を象徴的に現出して生の絆から解放される愛の救済 **Tristan und Isolde** へと作品的実践化を推し進めたものである。

ヴァーグナーの悲劇的芸術作品の本質には本来的に **Aischylos** の悲劇的芸術の投影の現在の反照として、時間概念の甚だしい総体的本質を想起させる親縁があった。たとえば、自らの庶子である双生児兄妹のジークムントとジークリンデの不倫な恋愛に怒って死を与えんとブリュンヒルデに命ずるヴォータンの肉親としての深い苦悩と、**Oresteia** 三部作第二部 **Choephoroi** の主人公、アガメムノーンの息子でエーレクトラの弟オレステースが、愛人アイギストスと共謀して父を殺害した母クリュタイメーストラの古い罪に復讐の新しい罪をアポロンの命により重ねんとする深い苦悩にみる一致、更には **Das Rheingold** に於けるアルベルヒによる黄金の掠奪と **Prometheus** 三部作 **Prometheus pyrphoros** の火の掠奪、**Die Walküre** 三幕終り、ブリュンヒルデの岩への縛りつけと **Prometheus desmotes** の巨人の鎖による縛りつけ、そして、**Siegfried** に於ける縛りつけられた者の解放と巨人の解放が相応していることは明白である。このアイスキュロスの悲劇的芸術の投影の現在の反照として、とりわけ材料伝説の詩化と劇化描出の技巧手段に著しい追随をしていたヴァーグナーに、古代ギリシャ的明朗性の反照のドイツ的再生を開始する天才、キリス

ト教的現代文化の荒廃と病弊の中で未来に対する *tröstliche Erwartung* を呼びおこしうる一つの快癒として、悲劇的文化の救済者、悲劇的認識の未来の英雄をニーチエは見いだしていたのである。しかし、古代ギリシャ的明朗性のドイツ的再生を開始する悲劇的芸術作品の主題は更に、現世的享楽と苦悩を仮象の原理の現実的観照、感性的官能の悟生的執着として止揚し、同情的救済愛とキリスト教的救済愛の二重の欲求に充足する根源的世界観へと発展していったのである。即ち、主題を現象の対応的客観性の模写として現実にとどめ、過剰にあふれて苦悩する総体的生を比喩的世界に実現して円環的構造を強要するのではなくして、全面的に明確な被規定性と結合して直線的な意志を求め、形而上学的緊張をたかめて抒情的な救済 *Parsifal* へと導くのである。

危険な歴史の曲り角に直面して人類の歴史を総体として自己の歴史と感ずる者は、時代的となるか、乃至は反時代的となるかのいずれかである。したがってヴァーグナーが、妖女クンドリーに心迷わせて聖槍を奪われたうえ重傷まで負わされる聖盃奉士の王アムフォルタスに自ら化身して墮落の告白をなし、救いを求めて加護を祈り、同情と罪の意識にめざめたパルジファルが、アムフォルタスの苦悩への同情ゆえに知を授かり、世界苦を悟って荘厳な奇蹟をおこし、アムフォルタスを救済するという贖罪と救済、そして奇蹟の再現による神秘的宗教劇、無私と平等の強い倫理に支えられた *Parsifal* に転向することは、進化論と唯物論が興隆して華やかな物質文明を繁栄させる現代の夜明けに警鐘して感傷的であり、人類を審美的な世界解釈と世界是認に対立する生の貧困化と消耗の *Wille zum Untergang* へと駆りたてる *dialektische Weltanschauung* を擁護してそれ自体悲劇的であったとも言うる。

2

ニーチエはもともと敬虔なキリスト教徒の家系に属していた。何世代にもわたってニーチエ家は、ルター的信仰に支えられてプロテスタント的な徳と確信に満ち、むしろ積極的に神に仕える仕事に従事していた。なかでもとりわけ父方の祖父 *Friedrich August Ludwig Nietzsche* は教区監督にまでなった人で

あり、フランス革命のもたらす自由思想運動がドイツ的情緒に危機としてせまった時、理性的思考様式促進のために徹底的に抗議した一人であった。ニーチェの父 Karl Ludwig Nietzsche も、プロイセンの Friedrich Wilhelm 四世の指示により、ザクセンのロエッケン村で牧師として深く精神的な信仰生活を送っていた。ニーチェの母 Franziska Nietzsche は、ザクセン領ポーブレスに定住していた牧師 Oehler の末娘であり、ニーチェにとってキリスト教は、全く深い信仰に根ざした現実そのものであった。しかも父方の祖先にポーランドの貴族がいたという父性的精神と、純粹のドイツ人である母方の母性的現実という、血液の二重系列に強い誇りをもっていたニーチェは、五歳にして父を失った時、ニーチェ家の伝統と父への郷愁から牧師になろうと熱心に考えていた。ピアノを習い、頌歌に伴奏をつけ、ヘンデルの合唱曲に啓示されて幻想曲を作るのもこの頃のことである。超キリスト教的、宗教的本質を再生すべく反時代の運命として深い憂愁に黄昏れ始めていた1881年7月21日のこと、友人であり又弟子でもあった Peter Gast に宛てた手紙の中に於てもキリスト教は、彼が現実に知りえた理想的な生活の最も優れた部分として、又、幼少の頃からキリスト教を慕い、キリスト教に対して礼を失する様な態度を抱いていたことは一度もなく、尚幼少の頃の神への憧れが決して消滅していないことを書き送っている。それどころか、柔和で真面目で単純、純潔な天性の牧師には怖れにちかい尊敬を払っていたし、精神的に生きる人達に最高の地位を確保させ、精神の権力を信じて粗野な暴力に目もくれない教会を、国家よりも高貴な制度であるとさえ考えていた。

したがってニーチェが、自由な普遍人間的、ギリシャ的、ディオニュソス頌歌的傾向を強制してドイツ的再生を試みた悲劇的芸術作品のめざしていたものは、アポロ的な造形芸術とディオニュソス的芸術としての音楽という、それ自体全く異なった芸術力が相並んで活動し始める時に生ずる審美的作用、

Unter dem unaufhörlichen Wechsel der Erscheinungen die ewig schöpferische, ewig zum Dasein zwingende, an diesem Erscheinungswechsel sich ewig befriedigende Urmutter!¹⁾

であった。それはギリシャ啓蒙哲学の批判的精神の徴符、純粹な問題分析の精神、ヨーロッパに於けるソクラテ斯的暗黒に対する一つの新しい生存理解、歴史理解を設定することであった。ギリシャ悲劇を再生せんとするニーチェにとって悲劇の舞台から追放されたディオニュソスを、学問の偏狭な自己評価から音楽によって救済すること、これが音楽の精神からの悲劇の誕生の主題であった。がしかし、キリスト教に対する作為的意図を持たぬ訳ではなかった。Geburt der Tragödie 24節では、キリスト教の教会に対し、

Meine Freunde, ihr, die ihr an die dionysische Musik glaubt, ihr wißt auch, was für uns die Tragödie bedeutet. In ihr haben wir, wiedergeboren aus der Musik, den tragischen Mythos — und in ihm dürft ihr alles hoffen und das Schmerzlichste vergessen! Das Schmerzlichste aber ist für uns alle — die lange Entwürdigung, unter der der deutsche Genius, entfremdet von Haus und Heimat, im Dienst tückischer Zwerge lebte. Ihr versteht das Wort — wie ihr auch, zum Schluß, meine Hoffnungen verstehen werdet.²⁾

と敵意を含んだ言辞を呈し、僧侶を悪意ある小人として、キリスト教をソクラテス的精神の一つの形をかえた所産とみなしている。

ニーチェにとって悲劇的意識が衝動と力の快感、ディオニュソスの原初的陶醉の快感、全ての創造的なものの根源としての快感であったのに比して、キリスト教的意識にとって悲劇的な出来事はその教理を聖化する同情を唆起するにしかすぎなかったからである。しかし、教会がたとえ偽りに満ちた国家であり、僧侶が官能性の不倶戴天の敵であったとしてもニーチェにとってさしあたっての影響はディオニュソス的能力の表現にまで及ぶとは思わなかったし、それを告発する程悪意に満ちてはいなかった。二千年という歴史の重圧が不可抗的に押し寄せて来て自らを損い、孤高な漂泊者として宿命に強制されるまでニーチェは、悲劇的世界観の展望が、ヨーロッパに滲透するソクラテス精神から解放する光学的律動であると信じて疑わなかった。

しかし、当時の文献学者達の大勢は、Ulrich von Wilamowitz-Möllendorff

に代表される、古代学を弁証し、ペシミズムの荒野で哲学と宗教を擁護する護憲主義的勢いの華やかな時代であった。したがって当然のことながら、ニーチェ思想の指揮者ヴァーグナーを狂喜させた *Geburt der Tragödie* の出版は、古典文献学者ニーチェの哲学及び古典文献学に対する実証的反論の契機をひきおこし、全く予期しえない体制の体質と敵対する結果に至った。即ち、*Geburt der Tragödie* が出版されてから五ヶ月後、Ulrich von Wilamowitz-Möllendorff は、ニーチェの哲学的思考様式の稀薄さを批判し、文献学的学識の、歴史的混同の事実を指摘して、学問的反論を許さない敗北に追いやったのである。このことはニーチェの思想に深い傷跡を残した。ニーチェは、このあまりに若く、性急な期待が駆りたてた時代はずれの思想を回想して、

Man erinnert sich vielleicht, zum mindesten unter meinen Freunden, daß ich anfangs mit einigen Irrtümern und Überschätzungen und jedenfalls als Hoffender auf diese moderne Welt losgegangen bin. Ich verstand — wer weiß, auf welche persönlichen Erfahrungen hin? den philosophischen Pessimismus des neunzehnten Jahrhunderts als Symptom einer höheren Kraft des Gedankens, einer siegreicheren Fülle des Lebens, als diese in der Philosophie Humes, Kants und Hegels zum Ausdruck gekommen war — ich nahm die tragische Erkenntnis als den schönsten Luxus unsrer Kultur, als deren kostbarste, vornehmste, gefährlichste Art Verschwendung, aber immerhin, auf Grund ihres Überreichtums, als ihren erlaubten Luxus. Desgleichen deutete ich mir die Musik Wagners zurecht zum Ausdruck einer dionysischen Mächtigkeit der Seele, in ihr glaubte ich das Erdbeben zu hören, mit dem eine von alters her aufgestaute Urkraft von Leben sich endlich Luft macht, gleichgültig dagegen, ob alles, was sich heute Kultur nennt, damit ins Wackeln gerät. Man sieht, was ich verkannt,³⁾

とのべている。

しかし、ヴァーグナー音楽の旗手として古代ギリシャを再生せんと試みていたニーチエとヴァグナーの決定的離反は、Siegfriedの悲しいパロディーを書いて急いで聖餐へ駆けつけ、贖罪と加護を祈って墮落の告白を行なう Parsifal 転向にその端を発する。

ニーチエにとって芸術は、哲学と同様、成長する生命と下降する生命の医療と助成の手段であった。したがってそれはいつも、苦悩と苦悩者を前提にして居り、しかもこの苦悩者が生命の充溢に苦しむ時、生に対する悲劇的洞察と展望が生まれ、生命の貧困に苦しむ者は安息と静寂を求め、生そのものに対する復讐が生まれてくると理解していた。ヴァーグナーは後者の二重の欲求に充足していたと思われる生、情念、美と官能からの逃避を著しく累積する欺瞞、術策、虚妄の形而上学に華美な粉飾を施し、審美的世界解釈に対立する罪の世界を情動的に実証せんとしたのである。ヴァーグナー転向の意味するパルジファルの変貌はそれ故に、単にアイスキュロスの精神のエウリピデス的変更にとどまりえなかった。それは、生の貧困化を加速度的に促進して、病患と疲労の没落への意志に導く破綻の徴候であり、die Tücke, die Rachsucht, die heimlichen Giftmischerei gegen die Voraussetzungen des Lebens,⁴⁾ 同情的救済愛とキリスト教的救済愛の二重の投影が交錯する奇蹟を再生して自らを昇華させんとする偽瞞の欲求であった。ニーチエの妹 Elisabeth Förster-Nietzscheはその著 *Der einsame Nietzsche* に於てヴァーグナー転向が必然的に帰結する反乱の教理を次のように報告している。

Da begann er plötzlich und zum erstenmal ausführlich von dem Parsifal zu reden und zwar ganz merkwürdig, nicht als von einem künstlerischen Plan, sondern von einem christlich-religiösen Erlebnis. Vielleicht fühlte Wagner, daß ein Bühnenweihfestspiel erdacht und komponiert von einem so schroffen Atheister, wie er sich meinem Bruder in Tribschen immer gezeigt hatte (und wie ihn sicher alle seine Freunde in den kecksten Aussprüchen bis zum Anfang der siebziger Jahre gekannt haben) kaum als ein christlich-religiöser Akt empfunden werden

könnte, wie er doch sollte. So fing er auf einmal an, meinem Bruder christliche Empfindungen und Erfahrungen wie Rene, Buße und allhand Hinneigungen zu christlichen Dogmen zu gestehen. Er erzählte ihm z. B. von dem Genuß, den er der Feier des heiligen Abendmahls verdankte — wohlverstanden der schmucklosen, protestantischen! Wenn es noch wenigstens das katholische Hochamt gewesen wäre, von welchem wohl jeder künstlerisch empfindende Mensch den tiefsten Eindruck erhält. Mein Bruder hatte eine große Vorliebe für aufrichtige, redlich Christen, wie sie ihm z. B. in Basel begegnet sind; aber er hielt es für unmöglich, daß jemand, der sich so wie Wagner bis zu den äußersten Konsequenzen als Atheist ausgesprochen hatte, jemals wieder zu einem frommen, naiven Glauben zurückkehren könnte. Er konnte deshalb Wagners plötzliche Wandlung nur als einen Versuch ansehen, sich mit den fromm gewordenen herrschenden Mächten in Deutschland zu arrangieren zu dem einzigen Zweck: um Erfolg zu haben.⁵⁾

より高い悲劇性を象徴的に現出する四部作⁶⁾の主題とは反対に、未だかつてどんな芸術家が望んだこともない程の勝利と征服の象徴として劇場での成功を Parsifal によってめざしたのである。深く駆りたてられた欲情はあまりに偏執的で強引であり、その支配的俳優的本能はいみじくもここに *wesentlich noch Theatermensch und Schauspieler, der begeistertste Mimomane, den es vielleicht gegeben hat, auch noch als Musiker...*⁷⁾ としてその本質を露呈し、音楽も、詩も、行為も、その姿勢を目的にする手段にしかすぎないことを証左した。Aischylos や Sophokles, Euripides の演劇が民衆の前で、しかも完全に聴かれることを保証されえたのは、芸術の享受にともなう宗教的祭典が行事される儀式の場合に限って開演されたのであり、国家の傑出した人々が直接、詩人、あるいは、指導者として参加したから、参集する人々には作品の崇高さに絶えず期待を満たして居り、音楽的理想をとらえるべき現実的典拠とし

て最上の効果を及ぼしえたのである。ヴァーグナーはこのことをよく知っていたと思われる。しかも、Ludwig 二世のあまりに異常な殊遇を受けて教皇権威主義の根深い、保守的、伝統的、地方的な人々の嫉視と反感を呼び起こし、喧騒をきわめた演奏会、故意に失敗をくりかえす俳優、著しく主題を歪曲する指揮者、とりわけ反ヴァーグナー熱を燃えたたせているバイエルン市民と批評家を前にして、悲劇的文化の救済者、悲劇的認識の未来の英雄ヴァーグナーの音楽は、一切の科学的実証精神と芸術家的独創性に支えられた世界解釈と世界是認に対立する感傷性と誇張で墮落の告白と祈り、深い信仰に支えられた救済を、舞台清被祝典劇 *Parsifal* で演じてみせたのである。しかし、ニーチェがヴァーグナー転向にあって最も攻撃するのは、劇場にあって人々は、群衆として自らを偽り、自らの発言権、選択権、更には神と世界に対する勇敢さまで放棄し、多数のもつ水準化で孤独を喪失し、*Im Theater wird man Volk, Herde, Weib, Pharisäer, Stimmvieh, Patronatsherr, Idiot — Wagnerianer.*⁸⁾ という、他ならぬこの点に於てであった。平等というキリスト教的平均化を促進する劇場の、自己否定的、自己抹殺の信仰と、病的で蒙昧主義的な理想へとおもむく背信と逆転、永遠に現実の彼岸にあって苛酷な生を強いる神の問題は、ヴァーグナー転向を契機としてキリスト教に対するニーチェの運命的戦いへと発展していった。

神の死の問題はこの様に、ヴァーグナーのキリスト教転向という過程の中で一切の劇場的なもの、即ち、平等、平均化、蓄群化を進める教会と、一切のパルジファル的なもの、即ち、罪と隣人愛、無私を強いる神に象徴される世紀末の様相を、人類の未来的展望のもとに把握する哲学的課題となっていた。したがって神の死の問題は、„Gott ist tot!“ という事実の確認を必要とする。即ち、超感性的世界が結果する現象を認識して、人類を正当に扱う事実の根拠が、どれ程生命と種族を保存、促進、育成するものであるかという評価の検証を許容しなければならない。本来的に掌握し難い人間の性向を、いかなる命題のもとに取り扱うか？ *Ich will!* か乃至は *Du sollst!* かである。

3

神の死の告知は、„Gott ist tot!“ と現在形で主張されている。神の死が現在形で主張された特別の動機はニーチェが、普遍的物一般の発生根拠を正当に評価する比較民族学の現段階に於て神の問題を扱い、全ての存在者と現存在の規定を支える形而上学的手段と方法を、その聖なる目的に従って人類の未来に透視させようとする試みがあったからである。これが神の死に於ける《何故》に対する答であり、二千年にわたる宿命的な災厄に緊張した自由闊達な精神が予感する、終末的世界観に反対運動を開始する刺激ともなりうる。この場合、神の死が単に、人間的意識の所産としてその非実在的性格が確認されるにとどまるならば、神の死の告知はむしろ、„Gott ist gestorben!“ とすべきであり、基点の判断を事実の確認にとどめ、普遍的価値観を一掃して歴史の一部に記憶を残せば足りる。この意味に理解する神の死は、宗教一般の終末を告知して仮象なき原理の累績された神秘主義を再生する象徴的表現にしかすぎず、神は、信仰に奉仕する医療の助成手段として Ding an sich の世界を止揚することは出来ない。„Gott ist gestorben!“ には確に、„Gott ist tot!“ が志向する可能な理想の現実的根拠を論理的に妨げ、献身的な自己犠牲を強要しているかの如くに見える信仰の、いかなる科学性をも許さずに終末に向う感傷さえ秘めて居り、形而上学の彼岸に於て聖なる定言的命法の確信を断念する強さの Pessimismus がある。がしかし、非実在的本質に規定された仮象の原理たる神には、死を断定する現実的根拠は無く、時間概念の甚だしい総体的本質の中で空間的広がりを集約することもありえない。神に規定は不可能であり、あらゆる考察の外にあってその判断を許さず、世界観論争の低調な次元でいかなる対等性を有することも無い。神は、たえず進行しつつある仮象の原理として相対的に理解され、確信する状態でなければならない。したがって、ニーチェが死したと断定する神は、人間的意識の所産としての非実在的仮象ではなくして、諸理想と諸理念をあらゆる名称として超感性的世界一般が影響力を失いつつあること、形而上学の世界が最早信ずるに足らなくなったということ、未来

的展望の先験的予感を孕んでニヒリズムが滲透しつつある状態をさしている。それ故に、神の死が過去のある一点に於て完了し、その初まりと終わりを現在と因由なき様相のもとに概観することは不可能であり、神の死の暴露する人類の不可抗的運命を歴史の内的論理に従って理解することも困難である。神の死の現在の意義は、超感性的世界に於ける価値の喪失が、神の存在にまで遡りうるか否か、神と神の死の因果関係が果して可能でなければならないか、乃至は、可能でありうるかという、形而上学と宗教に於ける渾然一体となった心理学的実験の問題として扱われなければならない。このことから結論しうる神の死の問題は、キリスト教の神の形而上学的根拠を検討し、人類をいかなる地点に於て把握し、高所的展望の視野のもとに保存、促進、育成せんとするものであるという意志を、その伝播する教理の中に概観してみる必要がある。

ニーチェは、キリスト教発生以前の人間の生存様式を、勝利と卓越への欲求で満たされた過剰な意志の主宰者、権力を生命そのものとして充溢する真実なる者、根源的一者のみ許されている淘汰の世界であると考えていた。彼等は、対等性に対するいかなる尊敬や畏敬を感じることなく、自らの克服し難い性向を根源的なものとして承認し、官能性と支配の衝動をこの世に於ける発展の法則とみなしてきたからである。しかし現在では、自己を原因、流儀として存在を楽しむことも最早無く、そればかりか *Was von Weibsbart, was von Knechtsart stammt und sonderlich der Pöbel-Mischmasch*:⁹⁾ として弱さを伝染させ、弱さを教え、人間を弱体化させるものを正当として肉体に凌辱を加え、生を否定、誹謗して僧侶の信頼を得るために *Nichts ist etwas wert, — das Leben ist nichts wert...*¹⁰⁾ 世界を創り出したのである。この点に於てキリスト教が最も優れていたのは、*Erst das Christentum hat den Teufel an die Wand der Welt gemalt; erst das Christentum hat die Sünde in die Welt gebracht.*¹¹⁾ ことである。心理学を援用して人間が手に出来るかぎりのものに負債感情をもたらし、僧侶への屈従を一層根本的に保証する *das Uneigennützig* の徳を強要し、存在のよってきたる地上的根拠より力への意志を抹消したのである。ニーチェにとって《意志》は、自主性と力の決定的徴符、

命令の熱情として孤独な憂愁より解放する意欲、全ての価値が転倒されて尚ニヒリズムを意欲することの出来る力の根源として一切の内在する観念を打破し、創造する主体として何者にもとらわれることのない自由な精神を意味していた。がしかし、この《意志》には、命令する力が乏しければ乏しい程益々一層厳しく命令する者を渴望するというドイツ的気質の二面性を有していた。したがって、法外な意志の病化と意志の不足している者にとって強さの教理、**Wille zur Macht** は、一切の認識を越えた魂の平安の彼岸にあると思われた。彼等にとって最も切実に必要とされるものは、弱さの意志に原因する平等と平均化、互いにいたわり啓蒙し、愛しあう蓄群化への本能であった。僧侶はかかる地点を人間認識の根源として、類いない抑圧と支配の統治形態を準備していたのである。ニーチェは、キリスト教発生の原因とその急激な伝播の原因がここに由来すると考えていた。しかしニーチェにあってキリスト教を最も弾劾するのは他ならぬこの点、意志の不足、病化している者を支配する本能よりも、強者を挫こうとする点、強者の勇気を喪失させて気の弱くなった倦怠に乘じ、彼等の誇り高い自信を動揺と良心の苛責とに転倒させようとする点である。しかも僧侶は、自分達の教理による人類の支配を完遂するために生を軽蔑し、身体に軽蔑の目を向けて地上の生活からのがれ出ようとしたのであるとニーチェは考えた。そのために僧侶は、自分達を人間の最高の類型として感じ、決して犯されることのない様にただ一種類の徳だけを教えてきたのである。即ち、真理は実在するということであつた。僧侶は徹底的に考えぬかれた心理学的偽造の方法論でもって記号とか身振り、言葉という表面的なものに気ままな解釈を加え、これ等諸々の錯覚を素材として **Der Mensch ist durch seine Irrtümer erzogen worden: er sah sich erstens immer nur unvollständig, zweitens legte er sich erdichtete Eigenschaften bei, drittens fühlte er sich in einer falschen Rangordnung zu Tier und Natur,¹²⁾** を自覚させる当然の結果として、ありもしないものを信じこませたのである。即ち、魂を、神の作用を、状態を、罪、救済を。

人は最早、自分の自由は夢見ることが出来るだけであつて、決して自分自身

を自由にする事の出来ない罪の世界にとじこめ、甚だしく物質的な概念の負債に由来する債務者として、Opfer (anfänglich zur Nahrung, im gröblichsten Verstande), Feste, Kapellen, Ehrenbezeugungen, vor allem Gehorsam—¹³⁾ といった義務を強いられる様になった。即ち、債務者である人間は、mit Gott zu versöhnen を取り戻す手段として、債権者への信頼をより一層確信するために自分の肉体とか自由、生命さえも抵当に入れて罪の世界を聖化し、低落な無数の人々と隣人の契りを交わし、抒情的な愛の行為を讃美し、敬虔な徳に積み重ねられた非利己的な無私の徳を信奉したのである。ニーチェはこういった類いの人間像に破壊的傾向、Rousseau, Schiller, Dante, Kant, Carlyle をみてとる。この様な傾向が結果するものは der Haß gegen den Geist, gegen Stolz, Mut, Freiheit, liebertinage des Geistes¹⁴⁾ であり、der Haß gegen die Sinne, gegen die Freuden der Sinne, gegen die Freude überhaupt...¹⁵⁾ であるとみなした。ニーチェはこの様な状態を人類の未来から希望の芽を奪う終末的状况、聖なる目的に欠けた世紀末の様相とみなし、生の幾千もの可能性を検証して人類を再び、自己を原因、流儀として存在を楽しむ Ich will! に解放すべく、自ら没落への意志、鉄槌者、ヨーロッパの運命として一切のキリスト教的なるものに《否》を発する。

神の死の現在の意義はこの終末的状况、世紀末の様相を確認することから生じる意志の解放であり、官能性に敵対する Du sollst! の命題を生を幾千もの可能な意欲の前に引出すことである。神の死は、終末的状况に至るこれ等一切のキリスト教的なもの、即ち、弱さを教え、弱さを伝染させる最大の負債感情としての罪の世界、永遠の真の生き方を福音する観想的世界の破壊的傾向がニーチェの前に崩壊しつつあることを意味している。したがって神の死の問題は、超感性的世界一般がその影響を失いつつある状態を確認することのみにはとどまらない。それは、キリスト教の神に対するニーチェの、形而上学を実験に供して自由な精神を、勝利と卓越への欲求で満たされた根源的世界観、ニヒリズムの世界に解放する試みでもある。ここに言うニヒリズムとは、感性的官能に戯れる美的形象の陶然とした観照の世界に死の救済を享与する Tristan の諦念

的意志否定でもなくば、Feuerbach から Bruno をへて Marx に至る史的唯物論展開途上に於ける不可抗的人間学拒否でもない。ニヒリズムの理解は、„Gott ist tot!“ というニーチエの言葉に即応して如何に認識され、如何なる態度をもって保留されたかという課題と同一の次元で扱われるべき相関的独自性を含んでいる。即ちニヒリズムは、単に普遍事物一般の認識に対する無とか拒否、衰退し、後退した精神の権力としての受動的ニヒリズムを確認するにとどまらず、破壊の暴力として、相対的な力に達する精神の上昇した権力の徴候としての能動的ニヒリズムを認識することによって、キリスト教的形而上学の超感性的世界の理念、理想が失いつつあるその影響のもとに、原初的生存の全く自由で官能的な意欲を Ich'will! の世界へ再び解放することである。したがってニヒリズムは、同行する神の死によって超感性的世界一般に対する形而下的、感性的現実をより一層促進するものであり、しかも神の死の現実的意義は、ただニヒリズム的状况を承認する形而上学に於てのみ可能な実験となりうる。

しかし、ニーチエが《否》を発するこれ等一切のキリスト教的なものを真に破壊的傾向と認め、神の死のもつ現在の意義を人類の未来に於ける新しい価値の録板と認めるためには、債務弁済を強いる債権者、神の存在と信頼が正当であるという命題と対立せざるをえなくなる。たとえ無私の徳を強いる僧侶の優れて理想的な支配の形態が、強さの意志を挫き、弱さを教える破壊的傾向を積極的に推し進めるものであろうとも、神の存在が形而上学の範囲にとどまり、奇蹟を再現して神秘的啓示を証左するものならば、悪法もまた法であるが如くに、神としての崇敬は払われなければならないからである。がしかし、ひとたび神への信頼が失なわれたならば、これ等一切のキリスト教的なものは空無に帰するというのがニーチエの運命的世界観であった。なぜなら、罪とか義務の観念は神に対する罪であり、義務のはずであり、もし債権者である神への信頼という前提が亡びたら、罪、義務の観念も必然的に消滅してしまうからである。ニーチエはかかる定義を前提としてキリスト教を支える信頼の根拠を、キリスト教の神、即ち、神の子たるイエスの生存様式に透視してみる。イエスにとって生とは、イエスにとって死とは、イエスにとって神とはいかなるもので

あったのか、と。

4

人間は動物と区別された時から既に宗教的であった。人間は、自らの越え難い性向の中に何か現実を超越したもの、死をも超越したものを生きるための支えとしたがる押え難い欲求に満たされていた。イエスも、モーゼやマホメットが思索者というよりはむしろ、行動によって教えを提示して成功をおさめた様に不動の個人的決意で流浪し、かかる本性的欲求を神という名のもとに信仰の由来に帰する衝動に支配されていた。

当時ユダヤには、ギリシャやゲルマン民族がそうであった様に、ユダヤ教の外に無数の宗教的なものが混在していた。しかし、この宗教的なものは極めて個人的な体験に基づく律法の伝道であったから、ユダヤ教は甚だ寛容に見遇したし、モーゼの教えをはみだす程侵略的でもなかったと思われる。イエスは幼少時以来、ユダヤ教より外には何も知らなかったし、旧約聖書を読むことに深い感銘を禁じえぬ程に純朴であった。とりわけダニエル書はイエスの幼い胸に強い感動を与えた様である。したがって、幼年の頃より神権に反抗したとか、自らの天職に従うためその道を常人より大きく外れていたと好んで信じたがる人達の思惑をよそに、悪魔を信じてこれを悪鬼とみなしたり、神経の病を悪霊の仕術と考える大衆の倫理にむしろ積極的に従っていた。イエスが富者、権力者を亡ぼし、階級を転倒させてこの世の中から高慢なものを卑しめる社会的革命を志したのはいつの頃からかはさだかでないが、大層に利己主義的な、ユダヤ教ばかりかギリシャ、ローマの祈りに対しても古代風の権力絶体主義から解き放たれた精神を望み、毅然として大衆の偏見を超越し、万物の父なる神を我父として神の国を描いた時には、紛れもなく中央政府の激しい怒りをかうことになった。イエスは、自らの中に湧き上る神への憧れを宗教とは呼ばなかったけれども、宗教的なもの以上に無節操な篤信家を思わせる宗教があったからである。この大胆な帰結の故にイエスは、ユダヤ教の只中で第一位の革命家、政治犯としての烙印を押されるに至った。それは、善き人々、正しき人達に対す

る反乱であり、階級、特権、秩序に対する反乱であった。より高い人間に対する不信、僧侶や神学的なもの的一切に対して発せられた否であった。しかしイエスは、決して自分が神であるという不敬な考えを抱いていた訳ではない。それは聖書の中によく見られる通りである。ただ彼は、神と直接に交わるものと感じ、神の子であると信じて疑わなかった。神はイエスの内に在り、神との絶えざる交わりによってイエスは神の胸中に生きていた。したがってイエスにとって表面上のこと、大地も海も天も地も、そして死ですらもそれらが何か神聖な啓示をもって表現されるようなことは決してしなかった。イエスにとって神は直接的に父であり、神である父の観念より生みだす道徳は、世紀末を告げる破壊的宗教でもなければ、理論的教訓でもない。一切の鎖から解き放たれた魂の自由に関する神の国、モーゼの宗教よりも更に純粋な掟を守護する理想の国、世界の改革者として歴史のうちに実を結ぶ精神の国を建設することがイエスの最も望んでいた革命であった。イエスは、この世に於ける一切の物質的権力を断念するこの神の国の理想にひたり、*Der tiefe Instinkt dafür, wie man leben müsse, um sich »im Himmel« zu fühlen, um sich »ewig« zu fühlen*¹⁶⁾、に支配されていた。しかもこの神の国は、貧者と無相続者のみに許されている黙示録的幻想の世界であり、現実社会が不可能なものとして退ぞけ、ただ思想の領域に於てしか十分な広がりを得ることの出来ない自由の世界、この神の国を開き放すのが、自らメシアとなったイエスである。この世界に懺悔や贖罪の世界は含まれてはいない。ただ自分の持っている物を貧しい者に施し、分ち与えるならばは入ることの出来る世界である。しかし、パリサイ人達を憤怒させた神の国の予言も、イエスの純粋な体験の当然の帰結として生じたものではなかった。イエスが好んだ神の国やメシアに関する言葉も、幼年の頃からこよなく愛したダニエル書から出たものであり、洗礼の儀式もただ人が喜ぶからという理由だけでヨハネの模倣を行なって居り、世俗的な行為に加わることを極度に避けていたイエスも、家族の者が大層反対したにも拘わらず、民衆がそれを望んでいるからという、ただそれだけの理由で奇蹟を行なおうとして失敗し、生地ナザレで生命の危機にさらされている。このことはイエスが、深い信仰に支

えられた神との関係から神になろうとして人間の世界に突き戻される試行錯誤を証明している。イエスはこのことを深く恥じ、傷ついている。イエスは高い理想の徳に支えられて行為を気高くし、神の国を開くのは自分であると本気で考えていたが、時として御し難い怒りに身をふるわせて信仰の無い者をののしり、食台をひっくりかえしたことすらもある。しかし全般的にみてイエスは、熱心なメシア信仰の徒が信ずる期待に応える神秘的な相貌に包まれていたから、人々によって神の座にすえられる潔い心に値していたとも思われる。即ち、一つの徳、出来るだけ多くのことを行なわないということによって、自分が神化されたと感じる深い本能に根ざしていたのである。人類をして神に向かって最大の歩みをさせたというこの点に於てイエスに神の称号を与えてもよさそうに思える。この大胆な、あくまでも時の政府に反抗するイエスの態度が結果するものをイエスは十分に心得ていた。そしてそのために犠牲になることは、神の国の到来を待ち望んでいた者にとって最も必要な出来事であった。イエスはむしろ進んでそれを求めたとも言いうる。パリサイ人達はそんなイエスに、ユダヤを支配していたローマ官憲が敏感に反応し、疑惑を刺激する《ユダヤ人の王》という呼称で反徒として、国事犯として法廷の前に引出した。その背後で彼等が断罪したかったのは、モーゼの宗教を冒瀆し、妨害したことへの復讐であった。法的殺害を企んでいたその主唱者ハナンの意図にも拘わらず実際には、宗教や哲学に対する熱情、真理に対する献身的熱情にローマ人達は退屈していたから、時の総督ピラトは、イエスが自分達に無害であることを見抜き、そればかりか祭司達の嫉妬であることを知って釈放の提議をすら民衆に向かって行なっている。既成の宗教に改革を加えようとする者に厳しく望んでいたモーゼの律法は、そういった人達に死刑を宣告していた。イエスが攻撃したのは疑いもなくこの宗教であったから、イエスは当然死刑を甘受する態度に変更はなかった。しかもイエスは、出来るだけその行事を崇高な神聖さにまで高めるため、議会の決定した死刑の宣告を知っていながら背信の都、エルサレムにあえて出かけて行った。イエスはピラトの思惑をよそに、ユダヤ教の根幹を震撼とさせる世紀の開始の犠牲となり、二千年にわたってユダヤ人を聖地より追放

する復讐の儀式に、考えられる限りの人格の偉大さを示したのである。それは、イエスが意図していた革命の最初の勝利であり、民衆感情の凱歌、心の潔い者の君臨する神の国到来の一瞬であった。

ここから結論しうることは、ニーチエのイエス像の基盤となっているものが、全く独自の精神と生活態度の典型であり、劣悪な環境の中からのみ現われる偉大な人格、古代貴族社会の権力機構を支持する既成の宗教に反乱の教理を掲げる反政府主義者ということであった。この聖なる勝利への卓越に深く根ざした理想主義者イエスの生活態度というものは、*Heute noch ist ein solches Leben möglich, für gewisse Menschen sogar notwendig: das echte, das ursprüngliche Christentum wird zu allen Zeiten möglich sein...*¹⁷⁾。ニーチエはこの様に、イエスの生の独自性を強調し、イエスの十字架上での死は、この独自の生の必然的帰結であるとして、自己の内の天国の意識に生きる者は、彼が無視した社会の制裁を自ら招かざるをえなかったと考える。

しかるに、幻想におそわれたマグダラのマリアの想像は、復活した神を世界に与え、人類の罪のために十字架にかかった神の子としてイエスを描いた、根源的キリスト教隠蔽の責任者パウロが、純粹に内面的な *frohe Botschafter*, ただ愛し、防禦することを知らず、本能をも否定する諦念的意志否定の冥想家イエスを歪曲して、虚構による神の世界を、この世に創り出したのである。マグダラのマリアにとってイエスは、自分を正当以上に扱い、卑しさとはずかしめの中に救いの手を差し伸べ、許されるということを教えて呉れた只一人の人、彼女の生の証しとしてイエスの甦りを願ったことは、深い女の愛であったと言いうるかもしれない。しかし、四世紀以来全世界に広まる形而上学的論議の発起人、福音書に聖なる条項を盛りこんでイエスの死を異教的神秘教へと一変せしめたパウロが待ち望んでいたのは、*die guten Philologen und Ärzte alexandrinischer Schulung* の知恵をはずかしめ、完全なる支配のもとに権力を自分の手の中におさめることであった。

Hitzig, sinnlich, melancholisch, böseartig im Haß に支配されていたパウロは、決して自分のものでなければ満足出来ない貧欲な性向におおわれ、何事

にも熱中出来ない猜疑心の強かったパウロは、狂信的な律法崇拜の広くいきわたったこの世界に対して、ただ憎悪と野心のみをその基底として自分のための世界が到来する機会を待ち望んでいたのである。協調して生きることの出来ないばかりか、ひどく欺き易い性癖を有していたパウロは、そのユダヤ教を欺くのにもまたとない機会を、新しい神への殉教の死、自らの安寧の当然である死を望んだイエスを、新しい信仰の神、十字架にかけられた神として犠牲の思想で粉飾し、三日目にして甦える復活の思想を福音することによって彼的手段を聖化するという、優れて反証しにくい心理学をそこに見いだしたのである。パウロがそれを信じていたか否かということはこの場合、全く別問題である。コロンブスはひどく誤まった考えから出発したがアメリカを発見した様に、ひどく人をあざむくのに効果があったことは事実であるし、成功は、動機が如何なるものであれ、それを神聖にして呉れるからである。

しかしいずれにせよこの心理学は、イエスの独自の生の谷間に混在する定言的命法、即ち、何も行なわず、抵抗せず、ただ諸々の万象から我身を潔く保つべく放下の徳に専念する諦念的意志否定の憂愁に満ちた本能を、弱さに由来する罪とか、赦し、罰、報いの世界に描き直したのは紛れもなく事実であるとニーチェは考える。しかも、権力の本来的な把手である罪を科して生きる者達には、悔い改める者を赦すための資格を与え、彼等はその代償として贖いを求める人達から、債務法にその起源を発する義務のかずかず、とりわけ服従をその返済として要求したのである。

人の罪のために死んだイエスが贖いを求めるというこの心理学は、教会権力とあいまって、淘汰と発展の法則を妨げる同情を擁護し、本来的にとらえられるもののなく、自由で責任の無い隣人への無関心を罪深さ、下劣さで同等の次元に扱う非利己的な表象に規定し、いつでも錯角から生じる愛の本質を、曖昧刺激的な官能から遠ざけてしまい、力に満ちあふれた支配の欲求をおろかな対等性にまで引き戻し、何よりも自分の身体とこの世を蔑む無私の徳を敬虔な信仰の証しとしてしまった。ここから結論しうる人間の典型はおおよそ想像がつく。何時も不完全にしか自分を見ることのない無自覚的人間、架空の諸性質を

自分に帰属させて画一化する人間的人間、動物や自然に対する誤まった位階関係から出発する蓄群的人間、絶体的と言われる価値観に何の疑いを抱くことも無く、ただひたすらに信仰する無思考的人間である。かかる典型が及ぼす社会的影は、生に潜在する不条理な矛盾を排斥して、理解可能な蓄群に強制するにとどまらず、情動的官能を蔑視して生を敵視させ、現世に何の執着を持つこともなく、人類の未来に何の希望を抱くこともない超感性的な世界を創りだす。そして、**Du sollst!** の命題はいまや、一切を神聖にする神の言葉として重く響きわたってくるのである。

5

ヴァーグナーを契機として開始されたキリスト教に対するニーチェの戦いが、一切の信頼を前提する神の問題に於て、ユダヤ教の統治に反抗する権力を探し求めていたパウロの虚構、陰謀の情熱を転倒させることに経過しながら、イエスを、パウロ以後の教理化から除去した独自の存在として別個に扱い、その手段に対する反論の契機を、生の毒害、誹謗、否定という概念による人間の価値低下と自己汚辱に究極する教会権力の象徴を空無に帰せしめることであった。それは、民族と人類の未来と運命に関し、文化をどの地点で始めるかについて形而上学が尚必要であると考えていたニーチェも、行為に於て劣悪な教会権力の欲望が、人類を保存、促進、育成すべき未来を妨げ、卑小で弱々しく、生を肯定し、意欲する意志に欠乏した人間の生存様式を眼前にして、聖なる目的に欠けた超感性的世界一般に於ける価値観を転倒せしめ、**Ich will!** を命題にした三つの変転、即ち、**Der Geist wird zum Kamele, und zum Löwen das Kamel, und zum Kinde zuletzt der Löwe**¹⁸⁾。を新しい価値の録板として人類の未来に掲げんとするのである。超感性的世界一般を神聖にする信頼の根拠は、ここにその事実を、事実として認めざるをえない歴史の審判を甘受することを余儀なくされた。

神の死の現在的意義は、超感性的世界一般に於ける至高の価値観を前提する信頼の根拠がニーチェの前に崩壊したことを確認した。最高の諸価値の確實性

の問題は、比較民族学の現段階に於て最早、如何なる欺瞞の心理学をしても実証しえないことを明らかにしている。がしかし、ニーチェにとって確実性の問題は、必ずしもある事柄を歴史的とするに際し、優位にたつものではなかった。即ち、ニーチェが神の死を告知し、死んだと断定するのは、信仰のよって来たるその確実性が、形而上学的であるからではなくして、人類をどれだけ保存、促進、育成するかについての価値の前提が、権力掌握に陶醉する僧侶の個人的欲求に埋没し、しかもそれが歴史の主たる原因となっているからである。したがって、神は死んだという提題の意義は、かかる最も根本的な価値の問題と解すべきである。そして、その最高の価値が価値を失ない、人間の未来に果されるべき《何故》に対する答が欠如し、深い確信がその根拠を失なったことである。即ち、神が死んだということは、現実の根拠と目標としての超感性世界一般がその影響力を失なったということであり、したがって人間は、最早自己の存在を支える如何なる根拠も持たない世界、自己を原因、流儀として存在を楽しむほかない無価値の世界、何故に対する答えの欠けたニヒリズムの世界に於て、自らの生成と超克への意志を駆りたてる原初的生存の、全く自由な淘汰と発展の法則にほかならない現実的生を生きなければならなくなる。人間の新しい偉大さを知る為の、人間を偉大たらしめる未踏の道を探る為のニヒリズムは、神の死とあいまって苦痛に耐える勇気を、裁く価値をも超克する勇気を要求して一層苛酷な生へと追いやる。しかし、最高価値を失なった精神の緊張は、最早探し求める者としてではなく、自分の為の独自の太陽を創造すべく、生の幾千もの可能な道を怖るべき孤独な同伴者、一つの《否》と一つの《然り》を伴なって彷徨し始めるのである。

〔I〕

- (1) F. Nietzsche: *Geburt der Tragödie*, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart 1964, S. 77.
- (2) *ibid.*: S. 109.
- (3) F. Nietzsche: *Nietzsche contra Wagner*, Carl Hanser Verlag, München 1960, S. 1047.
- (4) *ibid.*: S. 1053.
- (5) Elisabeth Förster Nietzsche: *Der einsame Nietzsche*, Alfred Kröner Verlag, Leipzig 1914, S. 16.

- (6) Das Rheingold, Die Walküre, Siegfried, Götterdämmerung を四部作とする Ring des Nibelungen.
- (7) F. Nietzsche: Nietzsche contra Wagner, S. 1042.
- (8) *ibid.*: S. 1042.
- (9) F. Nietzsche: Also sprach Zarathustra, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart 1964, S. 319.
- (10) F. Nietzsche: Götzendämmerung, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart 1964, S. 153.
- (11) F. Nietzsche: Menschliches Allzumenschliches, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart 1964, S. 215.
- (12) F. Nietzsche: Die fröhliche Wissenschaft, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart 1964, S. 113.
- (13) F. Nietzsche: Zur Genealogie der Moral, Carl Hanser Verlag, München 1960, S. 829.
- (14) F. Nietzsche: Der Antichrist, Carl Hanser Verlag, München 1960, S. 1181.
- (15) *ibid.*: S. 1181.
- (16) *ibid.*: S. 512.
- (17) *ibid.*: S. 516.
- (18) F. Nietzsche: Also sprach Zarathustra, S. 25.